

月の番組スタートから続く高視聴率と、驚いたときの言葉「じえじえ」が話題となったNHK連続テレビ小説『あまちゃん』。ドラマのモデルは、岩手県北東部の海沿いのまち久慈の「北限の海女」である。撮影も小袖海岸などを中心に行われ、久慈にはホテルの予約が困難になるほど観光客が押し寄せている。

毎話、ドラマの冒頭で1輛の電車が田園風景を駆け抜ける。久慈と宮古を南北に結ぶ、三陸鉄道北リアス線の車輛だ。このカットは久慈の南に接する九戸郡野田村で撮影された。ロケ地は、海岸から1キロほど離れた陸中野田駅の手前に広がる田園地帯である。

◆村民との一体感は情報公開から

三陸鉄道は、この田園地帯を抜けると海岸線に出る。東日本大震災による大津波は、高さ12メートルの防潮堤を粉碎し、防潮林をなぎ倒したあと三陸鉄道の線路もめぐり上げた。市街地を襲った津波

は野田を捨てません。今後も海の匂いを嗅いで生きたいと考えるはずです。だとすれば、500年後も1000年後も安心して暮らせる村をつくることを考えました」小田村長の構想は「3線堤」という。第1堤防は14メートルの防潮堤の再建、第2堤防は三陸鉄道と国道45号線の強化、第3堤防は高台団地の開発で出た土砂を盛土とした都市公園の整備。第3堤防から海側を災害危険区域として住民の居住を禁止する。震災からほどなくして、村長はこの構想を住民に説明すると主張した。

震災から2年半。祭で村民の心がさらに固結する野田村



「村長のプランは賛同できるものだった。ただ、村民に説明する資料づくりの時間が少ない。少し時間をください」と反対しま

1000年先の安全と安心をつくる 岩手・野田村復興支援

(2013年◆平成25年)

新田匡史

につた・まさお

illustration: Shigeyuki Sakata



変わる日本の『暮らし』と『まち』

18

は、500戸あまりの住宅を飲み込みながら中心部を壊滅させた。村役場のある中心部は瓦礫で埋

まわり、足の踏み場もない。電話局が流されて固定電話がダウン、携帯電話も通信不能に陥った。役場は孤立するが、それでも村民を守る必要がある。復興むらづくり推進課課長の松本良治さんは、当時を振り返ってこう語る。

「起こったことを考えるより、前に進むために必要なことを、ただひたすら考えていました」

村民の安否確認と避難所の整備に注力し、震災の翌朝には瓦礫撤去の重機を入れた。昼には被害の全貌を把握したが、多くの行方不明者がいる。無闇に重機を振り回せない。小田祐土村長は、ここで村民の度量を感じたという。

「損壊したとはいえ、家の中から持ち出したい財産や思い出の品があったはず。にもかかわらず、行方不明者の搜索のため、壊すことに同意してくださったのです」

村民の協力で、発生から3日後

には家屋の撤去が始まる。行方不明者は2週間余りで全員発見された。瓦礫撤去はピッチを上げ、4月下旬に完了する。村民の理解が得られた要因のひとつは、情報公開だったと松本課長は言う。

「隠さず、知り得たことをストレートに伝えるようにしたので」

防潮堤が破壊された。三陸鉄道のレールがめくれた。村は瓦礫で埋まった。この被害に対して、村が何をしているか。何ができないか。どの地区がどこまで復旧したか。どういう物資がいつ届くか。

「情報を公開することで、村民の不安を小さくしたかったのです」

情報を得た村民は、自分たちがすべきことを考え始める。復旧へ向けて、村の一体感が醸成されたのだ。やがて、住民から声がある。「次はどうするんだ?」。小田村長は、自らの復興構想を村民に話す機会が訪れたと考えた。

◆「つたのスクートの源泉

「よほどの事情がない限り、村民

したよ」(松本課長)

だが、村長は反対を抑え、震災

から2ヵ月後には構想を語る。「この時期に合意を取らないと実現しないと思いました。村民も震災の記憶が生々しかったので、安全に暮らしたいという思いが強かった。反対もありましたが、基本方針はご理解いただきました」

その1ヵ月ほど前、野田村をURが訪ねた。「お手伝いできることはございませんか」。松本課長は渡りに船だったと回想する。「小さな村では、部分的な知識を持つた職員はいても、復興全体を見通せる職員がいませんでした」

小田村長は、URに復興事業の支援を依頼した。他の被災地のように事業者として復興支援住宅の建設等に携わるのではなく、区画整理から住宅建設に至る復興全体の計画策定を支援する。そこではURが蓄積したノウハウ、岩手県や国土交通省との人脈が生かされている。村だけでは困難な情報収集が可能となり、復興プラン策定

も勢いを増した。小田村長は別の面でもURに感謝している。「URの方は説明のプロです。難しい話でも村民がわかるように説明してくれるので、村民の理解も非常に早く進んでいます」

支援に携わるUR職員の山形辰幸によると、URの職員の席が役場にあるという。復興を推進する仲間と認められ、役場の職員と同じデザインの名刺も用意された。

今年8月、1万人が訪れる野田まつりが開催された。実行委員長の佐藤仁昭さんは言う。

「この祭りは、村民が毎年楽しみにしている一大イベントです」

だが震災の年は中止。神輿と山車が、3組のうち2組が津波で流された。小田村長は述懐する。

「その代わり、復興イベントと称してやったのです。もちろん最初は悩みました。こんなときに祭りをやるのかと。でも祭りには鎮魂という意味もあります。亡くなった人のためにも、みんなで頑張ろうという意味でもやろうと」

イベントでは、被災を免れた神輿と山車を村民全員で引いた。「それを見て涙を流す人もいました。村民は、野田の素晴らしさを再認識したと思います」

今年、被害にあった1組の山車と子ども神輿3団体が復活した。「来年には、もう1組の神輿と山車も戻ってきます。ようやく、震災前の野田まつりに戻ります」

小田村長は、住民の家が建って3線堤の形が見え、神輿と山車が戻ってはじめて、村民には復興が実感できるだろうと語る。来年には、それが現実のものとなる。

街に、ルネッサンス



【企画制作】新潮社